

## BOOK REVIEW

## サブリミナル・インパクト - 情動と潜在認知の時代 -

下條信輔 著

筑摩書房 ISBN978-4480064608 2008年発行

評者：北崎充晃（豊橋技術科学大学）

「意識の科学」のやや表層的とも言える流行の中で、本書はその流れに逆らうように心の潜在性を中心に社会に斬り込んでいく。本書は、伝統的とも言える知覚心理学に基盤をおきつつ、認知における潜在性の役割、特に情動のメカニズムと機能、そして社会との関係あるいは経済・社会のメカニズムの解明を扱っている。

筆者の文章のうまさや歯切れの良さにもかかわらず、本書は決して易しくはない。やや長い序章にはこれでもかという程の情報が詰め込まれ、それが続く章のなかで伏線を回収するかのように解かれて、あるいは議論されていく。そして、各章の構成も、問題を提起し、一緒に考え、科学的知見や社会的事実を示しながら筆者なりの考察を行うという形になっている。そこには口に入れたとたんにとろけるデザートのような口当たりのよさはなく、むしろごつごつとした荒野を踏破する生のサイエンス行為そのままがあると言えるだろう。

しかし、そして、本書は圧倒的に楽しい。

本書の中核の一つとなっているのは筆者らが発見した「視線のカスケード現象」である。それは、二つの顔や幾何学図形などを見比べるときに、徐々にどちらかの対象を見る頻度・時間が増えていき、80-90%を越えたところで、視線がよく偏った方を「好きだ」と答えるという知見から命名された。被験者は、自分の視線が片方に偏っていくことに気づくこともないし、最終的な好きだという判断（選好判断）が視線に依存しているとは思わない。そして、好きだという情動判断のはるか以前から少しずつ、徐々に、視線の偏り（行動の変化）が生じていき、情動を形成していく。筆者は、これを「意識レベルの選好判断になくてはならない（潜在レベルの）前駆過程」と説明する。この前駆過程は、潜在的であるがゆえに、当人には気づかれず、外部から操作されても強力的に機能する。実際に、筆者等は巧妙に視線の偏りを実験的に操作することで、被験者の選好を操作することに成功している。

この知見を基軸に、我々の意識化された自己が実際には多くの潜在的処理に依存していること、潜在的処理が「情動」を介して如何に我々を操作しているかが説明されていく。本書では、特に経済と政治についての興味深

い、そしてややセンセーショナルな事例紹介と考察がなされている。あとがきにおいて、約10年前の自著「サブリミナル・マインド-潜在的人間観のゆくえ-」(中公新書、1996年)を基礎編とするなら、本著を応用編と位置づけられると述べている。基礎と応用には様々な意味があり、知覚や社会心理についての基礎科学と経済・政治へのアプローチを含む応用科学という意味でもあるが、むしろ筆者が渡米して10年をかけて挑んできた情動と潜在認知の実証的研究、それが社会においてどういう意味を持つかを考えるという実践を意味しているのだと思う。

ただし、筆者はまさに基礎科学者であり、自ら応用研究に着手したり、安易な応用の提案をしたりはしない。本著も筆者の考察を示すことで、読者が深く考えることを要請するように見える。それが、ときにはまどろっこしく、難解に感じさせるゆえでもあるが。

本書を読んでいくと、自己をなしているものがあいまいになってくる。我々は、ほとんどが潜在認知(潜在的処理)あるいは前意識からなっており、それらに強く影響を受け、しかもそれに気づくことはできない。意識化可能な領域はほんの少ししかない。そして、潜在と顕在(意識)の境界はそれほど

どはっきりしたものではなく、揺らいでおり、その揺らぎを含む前意識が人間と外界とのインタフェースをなしているというモデルが提起される。つまり、意識化される自己と前意識、そして外界・環境がぼんやりと混ざった世界が描かれているとも言える。このような議論が、最後の章で「創造性」とは何かという問題とともに語られる。創造性は、実はこのようなあいまいな揺らぎを含む暗黙知の海の中から非常に受動的に生まれてくる可能性がある。潜在認知、それに由来する情動、そして暗黙知は意識化できず、自ら制御不可能で、しかも避けがたい影響を我々におよぼす。では、全ては制御不可能なのか。筆者は、あいまいな答えをしているように見える。潜在認知はなくてはならないものであり制御不可能であるが、潜在性を利用して逆に抗う方法もある、そして創造性については潜在性が利用されていることに触れたりもする。確かなのは、「潜在性を考えろ、考慮範囲に入れろ」という態度だと思う。

科学者として、勇気づけられる一冊である。

